

レイチェル・カーソンとその思想

小川 真理子

基礎教育課程

Rachel Carson and Her Sense of Wonder

OGAWA Mariko

Division of Liberal Arts and Science

(Received November 12, 2005 ; Accepted January 18, 2006)

1. はじめに

2004年の11月に、東京工芸大学情報館の公開講座で「レイチェル・カーソン ―自然に魅せられて―」という講座を担当した¹⁾。その際、受講者がレイチェル・カーソンを知っているかどうか聞いたのだが、参加者の1割程度しか知っている人はいなかった。また、知っている人でも、『沈黙の春』の作者であることくらいで、その素顔を知る人はほとんどいなかったようだ（ただ一人、「レイチェル・カーソンの講演だということで、聞きに来ました」と講演の後で自己紹介してくださった方があった）。

レイチェル・カーソンは環境分野では知られているとはいえ、一般の知名度の点でかなり低く、その業績や現代への貢献度からするとかなりもったいない人である。そこで今回、日本におけるレイチェル・カーソンの普及も視野に入れて、主に“自然へのまなざし”という観点からカーソンについて論じてみる。

2. レイチェル・カーソンとその業績

1907年、ペンシルバニア州ピッツバーグ近郊にある農場で生まれたレイチェルは、自然の大好きな母親に育てられ、幼いときから自然に親しんできた。貧しい家庭ではあったが、成績優秀者に贈られる奨学金を得て、ペンシルバニア女子大学に進学する。この時点では作家になるつもりで英文学を学んでいたレイチェルだったが、2年生のとき、生物の先生の授業に影響を受け、また幼いときからの自然への憧憬もあって生物学へ専攻を変更した。当時の社会状況では女性の生物学者が活躍する土壤はなく、多くの人に反対された中での変更であった²⁾。

大学卒業後は、ホプキンズ海洋生物研究所、ジョン・ホプキンズ大学大学院で勉強を続けたが、社会はゆっくり研究することを許さなかった。1929年に世界全体を襲っ

た大恐慌で、カーソンの家族もペンシルバニアの家をたまたみ、カーソンが勉学を続けるボルチモアで一緒に住むようになる。また、その後の父親の死で、彼女は実質的に一家の経済的な支柱として、母、姉とその二人の子どもを養わざるをえなくなった。このため、科学調査部に仕事を求めていき、そこで「海の中」というラジオ番組の制作に携わるようになった。その後公務員試験を受けて、野生生物漁業局職員として採用された。

カーソンの仕事は主に野生生物漁業局の出す海の生物に関するパンフレットの編集であった。彼女はもともと作家志望であったこともあり、文章を書くことは得意であったし、その上自然を隅々まで探求する心を持っていたので、この仕事は適職だっただろう。しかし、その間に書いた文章があまりにも文学的であったためこれを月刊誌に投稿したことから、彼女の人生は違った展開を始めた。

1941年にカーソンは『潮風の下で』³⁾ という本を出版した。これは、もともと職場で作っていた自然保護ブックレットの序文としてカーソンが書いたものであったが、内容があまりにも深く、序文にするにはもったいないものであったため、上司のアドバイスで「海の中」というタイトルで月刊誌・アトランティック・マンスリーに投稿した。これを読んだ編集者が「本にしないか」と持ちかけて出版したものである。ただ、出版した1月後に第二次世界大戦が勃発してしまい、本どころではなくなってほとんど売れずに終わってしまった。

最初に出した著書『潮風の下で』は、残念ながら第2次世界大戦の影響を受けてほとんど売れなかった。しかし、戦後に出した『我らをめぐる海』⁴⁾ はベストセラーとなり、再び世に出した『潮風の下で』や次に出版した『海辺』⁵⁾ も熱狂的に世間に迎えられた。こうして、レイチェル・カーソンは自然を紹介するベストセラー作家として知られるようになった。

アメリカは戦後発展を続け、農業も発展してきた。しかし DDT などをヘリコプターで空中散布するようになると、これに抗議する訴訟が各地で起きるようになってきた⁶⁾。カーソンは農薬散布の結果がどうなるかを示した『沈黙の春』⁷⁾の執筆をはじめ、4 年間かけてこれを完成させた。

『沈黙の春』は発売前から大きな反響を呼び起こし、反対派からはカーソンへの中傷、農薬の安全性の強調、出版社への脅迫が、共感派からは多くの励ましが届いた。その反響の大きさは、時の大統領のケネディの記者会見で「DDT の広範な使用に対して科学者の間で関心が高まりつつあるが、農務省や公衆衛生局ではどのように対応するか」という質問が出たことでも明らかである。ケネディは「既に調査にかかっています。特にカーソンさんの本が出版された後ですが」と答えている⁸⁾。ケネディは直属の科学諮問委員会に調査を命じ、委員会は調査の末に「環境中における残留物質の増大は残留性のある化学物質の削減によってのみ抑制できる」という報告をし、『沈黙の春』の内容を支持した。この動きはその後アメリカ環境保護局の設置をもたらし、それ以降のアメリカの環境政策に大きな影響を与えるものとなった。

3. 『沈黙の春』

『沈黙の春』は、出版される前にまず雑誌「ニュー Yorker」に掲載されたが⁹⁾、その時点ですぐに大きな反響を呼んだ。特に化学薬品会社は、農薬の安全性をうたえるのに躍起になった。

これはすでに環境科学ではバイブルといわれるほどの本であり、読んでいる人も多いと思うが、論旨は次の4点からなっている。

1) 人間は恐るべき力を手にしてしまった。

カーソンの考えていた恐るべき力とは、一つは核(原子力)、一つは化学物質であると思われる。この両方を、人類は第二次世界大戦を通じて手にしてしまった。『沈黙の春』ではこのうちの化学物質に関して述べているのではあるが、カーソンは核に対して、大きな不安を感じていた。このことは『沈黙の春』の中でも随所に感じられる。またこの二つは、どちらも戦争が作り上げたものともいえる。戦争が終わり、原子爆弾の恐ろしさ、各国の核爆弾実験の脅威を感じ、また盛んに飛行機による DDT の散布が行われるようになって、その二つの力については特に感じるものがあつたであろう。

2) 生命の連鎖が、毒の連鎖になる。

DDT をまかれた木の葉は枯葉となって落ちる。

それをミミズが食べる、そのミミズを鳥が食べる・・・という生命の連鎖の中で、DDT はだんだん蓄積されていく。そして、思いもかけなかった生き物が死んでいくという結果になってしまう。

逆に駆除しようとしていた虫のほうはすぐに耐性を獲得してしまい、それを駆除するのにはもっと大量の散布が必要になってしまう。

3) 最後は人間

食物連鎖の最後には人間が存在する。動物の中で濃縮された毒は、人間をも攻撃せずにはいない。癌、遺伝子の損傷などの危険が大きくなっている。

4) 別の道

『沈黙の春』の最後の章は、「別の道」と題されている。今まで世界が進んできた道は、破壊と破滅へとつながっている。ここで、別の道を行くよう、思案をめぐらせねばならないという警鐘を鳴らしている。

このように、『沈黙の春』は地球規模の環境悪化を告発し、環境保護の重要性を認識させる上で大きな役割を果たした。このため本書に対して、主に化学薬品会社から、出版に対する圧力や脅し、農薬擁護キャンペーンが次々と発せられたが、逆にこの本によって目を覚まされる読者も多かった。化学薬品への不安が高まる中、時の米国大統領ケネディが科学諮問委員会に農薬に関しての調査をさせるなど環境への取り組みが始まるようになった。これらの具体的な例については本論文の主題から外れるので、詳細は他の参考図書を読んでいただきたい^{10), 11)}。

『沈黙の春』は化学薬品(農薬など)の使用に関して告発している書ではあるが、それだけにとどまらない大きなテーマを投げかけている。

一つは、「第二次世界大戦後、右肩上がりに発展してきた科学に対する全面的信頼に、真っ向から疑問符をぶつけた」ことである。特に西欧では、産業革命以来多くの発見、発明が、人々の生活を豊かにしてきた。科学を発展させることが社会を発展させ、ひいては人々に貢献することであるという、科学至上主義を疑う人などいない時代だった。そこに、「科学といえども、使い方をきちんとしなくてはかえってうまくいなくなる」という一石を投じたのである。

『沈黙の春』の中でのもう一つの、しかし重要なメッセージは、「地球は人間だけのものではない、人間も自然の一部」ということである。これは四季折々の美しさの中で生活し、自然と人間が一体となった人間観を持ち続けてきた我々東洋系の人間には理解しやすいメッセージであるが、「人間中心主義」「人間尊重」が主であった

西欧においては革命的なメッセージであった。もともと西欧社会は神、人、動物、植物という階層構造の枠組みの中で育ってきた。それは創造主→人→自然（Nature）という構図であり、この構図は近代に至るまで連綿と続いてきて、西欧の人々のバックボーンともなっている¹²⁾。従って、人間対自然の図式において、人間は自然を征服するものであったのだ。事実、産業革命以来多くの技術的な革新があり、自然の脅威を克服してきたという自負もあった。それに対し、人間も自然の一部であるという考え方をここではっきりと述べたのである。彼女は、次のように述べている。

「私たちは世界観を変えなければならない。人間が一番偉い、という態度を捨て去るべきだ。自然環境そのものの中に、生物の個体数を制限する道があり手段がある場合が多いことを知らなければならない。そしてそれは人間が手を下すよりもはるかに無駄なく行われている」これからもわかるように、『沈黙の春』の内容は、それまで西欧の人々がよりどころとしてきた世界観、自然観の根本からの変革でもあったのである。

4. 『沈黙の春』を貫く自然への愛

実はカーソンは、『沈黙の春』を自分から書きたくて書いたのではない。アメリカでは当時、飛行機による農薬の散布が行われていたが、空からのDDTの散布によって、大量の鳥や魚が死んでしまう事件があった。これに対して、この「大量虐殺」をやめさせようという自然愛好家の投書が新聞に載り、やはり空中散布に怒りをもっていたカーソンの友人のオルガ・ハキンズによってそのコピーがカーソンに届き、同時にこの事件を援助するように頼まれたのだった。カーソンはそれを記事に書いてくれる人を探したのだが、結局見つからず、また魚や鳥が死んでいくのを見過ごすこともできずに、自分で書くことを決意したのだった¹³⁾。

もともとカーソンは声を大にして何かを告発したり、企業を相手取って論陣をはったりするタイプではなかった。それまでは自然、特に海をテーマとした自然作家であり、その方面の著書でのベストセラー作家でもあった。自然の不思議、自然の魅力を読者に伝えることを大切にする作家であった。そのような女性が、どうしてアメリカの巨大企業、というより近代社会を相手取った告発をすることができたのだろう。

幼いときからカーソンは自然に興味を持ち、虫や動物を友としてきた。最も幼いときに作った手作り絵本が動物をテーマとしたものであり、かつそこに登場する動物が全て自分が飼っている、または自分の農場で見かける動物であったということが、それを良くあらわしてい

る¹⁴⁾。単に動物を描いたのではなく、友達としての動物を描いたのである。また作家を志しながらも、大学2年生のときに自然の魅力に導かれて自然科学を専攻した話も有名である。

野生生物漁業局に就職してからは、海の生物に関するパンフレットや自然保護ブックレットの編集が大きな仕事でもあり、その仕事の関係で全米の国立公園調査などをしたり、海洋調査船に乗り込んで調査を見学したりするなど仕事においても自然を大に楽しみ、自然への畏敬の念は深まっていた。仕事以外でも、オーデュボン協会の主催する野鳥観察界などにも常に参加しており、1948年からは協会役員にもなっていた¹⁵⁾。

戦後『われらをめぐる海』を出版してベストセラーとなり、経済的余裕を得たカーソンはメイン州の海岸に別荘を購入した。ここで彼女は大好きな海を思う存分堪能する。次の著作である『海辺』の挿絵作家であるボブ・ハインズと一緒に、海の生物を何時間でも観察してすごした。汐の満ち引きが何回も行われる間ずっと潮溜まりで観察を続け、体が硬くなって動けなくなってしまうこともあった。また、別荘の隣人のドロシー・フリーマンも自然と読書の好きな女性であったため、非常に仲良くなった二人は自然をともに楽しんで過ごした¹⁶⁾。

このようにカーソンのまわりにはいつでも自然があり、それを楽しんでいたことが、『沈黙の春』の執筆に際しても、これを書かずにいられなかった原動力ともなったのは間違いない。農薬散布による鳥たちの大量死を知って、何もせずに手をこまねていることは、鳥への愛が許さなかった。「この本を仕上げなければツグミたちの歌を幸せな気持ちで聴くことができないでしょう」という言葉がそれを端的に語っている¹⁷⁾。

膨大な資料を整理して行う執筆は4年にもわたって続いた。その間、母の死、姪の息子のロジャー（姪が亡くなってから、カーソンが引き取って育てていた）の病気、そしてなによりカーソン本人がさまざまな病気に悩まされた。中でも乳がんが彼女の命取りになったのだった。しかし、おそいかかる悪条件をはねのけて本の執筆にあたらせたもの、それは一般的な自然への愛ではなく、あのツグミを助けたい、あのスナガニに誉められたいという、具体的な鳥や動物への愛情であったと思う。

また、そのような自然への純粋な愛で裏打ちされているからこそ、『沈黙の春』が一般的な啓蒙書とは違って読んでいて嫌味がなく素直に読める、また深く考えさせられるものとなっているのである。

5. 『センス・オブ・ワンダー』

レイチェルのほかの著書とはちょっと違って、『セン

ス・オブ・ワンダー』¹⁸⁾は幼い子どもを持つお母さんに向けて書かれている。これはもともと「子ども達に驚異の目をみはらせよう」というタイトルで女性向けの雑誌「ウーマンズ ホーム コンパニオン」に掲載したエッセイである¹⁹⁾。カーソンは生前この本の出版を望んでいたが、命の時間がそれを許さなかった。そのため残された人たちが、カーソンの死後、これに写真をつけて一冊の本として出版した。

この本はメイン州の別荘で、姪の息子のロジャーと一緒に自然を楽しんでいる様子を描写したものであるが、カーソンの自然への考え方が全編を通して、難しい言葉ではなく若い女性にわかりやすい表現で書かれている。

まず印象的なのが、はじめに出てくる、嵐の夜に1歳8ヶ月のロジャーを毛布にくるんで海岸に降りて行く場面である。普通の親は、そのようなことはしない。夜、それも嵐の夜など美しいこと、楽しいことなどないと思っているからだ。しかし二人はそこで自然界の大きな力に出会い、心からわきあがるよろこびに満たされて一緒に笑い声をあげてしまう。ロジャーにとっては初めて、自然の力を見せられた場面だ。2、3日して嵐がやんだ晩も、今度はライトを照らしながら水際まで行ってみる。まだ強い風が吹き、波がとどろく中で、スナガニが大自然にたった一匹で立ち向かっている。我々が家の中でテレビを見たり眠ったりしているとき、他の生物のことなど全く念頭にないようなときでも、自然とそこでの生物の営みは行われているのである。つい忘れがちなそのことから、この本は書き始められている。

——私は子どもにとっても、子どもを理解しようとする親にとっても、「知る」ことは、「感じる」ことの半分的重要性さえも持っていないと固く信じている。もしも、もろもろの事実が将来、知識や知恵を生み出す種子であるならば、情緒や感覚は、この種子をはぐくむ肥沃な土壌である。幼年期は、この土壌をたくわえるときである。——

これはこの本の中で最も多くいろいろな人に引用されている部分である。まず自然に触れて、その中から自然の不思議を感じることで、そしてそれを深めていくことの大切さを、カーソンはその幼少時の体験で学んだと思われる。本の中ではロジャーと自分の体験を語りながらも、カーソンの心の中には幼い時に母親と一緒に触れた自然の体験がオーバーラップしていたであろう。カーソンの母は結婚前には教師をしていた非常に理知的な女性で、自然を愛し、幼いカーソンと一緒に自然探求をしていた。このエッセイを手にしたカーソンの母親は、読みながら昔を思い出して涙したという。

この、自然をそのまま認め、自然から学ぶ姿勢こそ、

カーソンの中心を貫いていた思想である。幼児期の体験以降も、常にカーソンは自然への限りない興味を抱いてきた。そしてそれが、特に幼児期の体験として大きなものであると、カーソンは教えてくれたのである。

6. 『沈黙の春』と『センス・オブ・ワンダー』

『沈黙の春』は、発売以前から賛否両陣営からの大きな反響を呼び、人々の目を環境問題に向けさせるだけでなく、実際の社会を動かした。その後も環境学の教科書的な存在として読みつがれていった。特に1960年代以降、フロンガス、温暖化、ホルモンやダイオキシン問題など、環境問題は次々と新しい矛盾を露呈してきている。癌の危険性だけでなく、ホルモン異常等『沈黙の春』では触れられていなかった危険もでてきている²⁰⁾。

しかし、「人間も自然の一部」というカーソンのメッセージはますます正しいものとして多くの人に認識されるようになってきている。このメッセージは1970年にはアースデイのうねりとなり、その後も世界中の消費者運動に引き継がれている。日本でも1988年にレイチェル・カーソン日本協会が発足しその理念を生かすべく活動している。

一方『センス・オブ・ワンダー』のほうは読みやすく、内容も平易であるということもあって、『沈黙の春』とは違う層の読者が多く、初めは若いお母さんに好んで読まれていた。しかしその後環境教育の観点から、その理念が大きくクローズアップされるようになってきた。つまり、子ども達にまず環境の悪化について認識させるよりも、自然を好きな子どもになってもらうことのほうが先なのである。それなしで、頭でいろいろな問題についてわかって、自然を守っていこうという原動力にはならないのだ。カーソンが数々の病気などの困難を乗り越えて『沈黙の春』を書き上げた力となったものが、自然への具体的な愛であったのと同じように。

アメリカでは子どものために「Teaching Kids to Love the Earth」という環境教育プログラムが開発されているが、これはカーソンの『センス・オブ・ワンダー』の思想を取り入れたものである。これを受けて日本でもNPO法人ティーチングキッズやセンス・オブ・ワンダー自然学校など、子どもたちに自然を体験させ、自然の不思議を教えるプログラムが活躍している。

現代の特に都会においては自然がどんどんと消滅していき、子どもの遊びも室内ゲーム、コンピュータゲームが中心になってきている。その中で子どもたちは体力も衰えたが²¹⁾、何かを実体験し、処理していく能力が著しく未発達になってきてしまった。そのことが、子どもたちの生きる力を弱めたり、精神的ももろく、すぐに切れ

る子を作り出したりしているともいえる。『センス・オブ・ワンダー』に啓発された環境教育プログラムはそのような自然の中で遊び、楽しむことを通して子どもたちの精神活動を活発にし、豊かな人間性を回復するのにこれからますますその価値を高めていくと思われる。

このように、『沈黙の春』のような大きな反響をもたらすことがなかった『センス・オブ・ワンダー』ではあるが、自然を学ぶ上では大きな指針として多くの人々の支持を得てきた。今でも、というか、現代になってますます、カーソンの自然への姿勢から我々が学ぶものは大きい。

7. おわりに

人間も自然の一部である、自然を知ることよりも、感じる事が最も大切なことである、というカーソンの考え方は、没後40年以上たった今も常に真理であり続けている。

しかし、『沈黙の春』で警告された自然の状態は、その後の多くの努力や京都議定書などの縛りにもかかわらずますます複雑かつ悪化している。確かに、環境の大切さを世界中が感じ、守ることが必要であるという理念は多くの国や人々に一般的になった。そのための法規制もかなり進んできている。それでもなお、今まで既に放出されてしまったフロンガスなどに加えて、多くの化学物質が今でも環境中に放出されている。

これは、人間がまだまだ「人間を守るために環境を守らねばならない」という意識から抜け出られず、自然と人間を対置して考えてしまうことと無縁ではない。都会の生活があまりにも自然から離れてしまい、自然を自分と一体として考えることがしにくい社会になってきているからである。

その意味でも、今後ますます環境教育の重要性は高まってくるだろう。特に幼い時期に自然に触れる体験をすること、自然への愛情を持てるようにすることは今後の地球環境の行く手に大きな違いとなって現れてくると思われる。『センス・オブ・ワンダー』のメッセージを我々

はしっかりと受け止めねばならない。

参考文献

- 1) 東京工芸大学情報館 秋期公開講座
- 2) 『レイチェル レイチェル・カーソン「沈黙の春」の生涯』
“Rachel Carson Witness for Nature” Linda Lear, Henry Holt & Co, 1997
- 3) 『潮風の下に』 “Under the Sea-Wind A Naturalist’s Picture of Ocean Life” Rachel Carson, Simon & Schuster, 1941 邦訳は上遠恵子訳、宝島社、1993
- 4) 『我らをめぐる海』 “The Sea around Us” Rachel Carson, Oxford University Press, 1951 邦訳は日下実男訳、ハヤカワ文庫、1977
- 5) 『海辺』 “The Edge of the Sea” Rachel Carson, Houghton Mifflin Company, 1955 邦訳は上遠恵子訳、平河出版社、1987
- 6) “Aerial Spray Program Imperils Wildlife” Beatrice Trum Hunter, Boston Sunday Herald, January 12, 1958
- 7) 『沈黙の春』 “Silent Spring” Rachel Carson, Houghton Mifflin Company, 1965 邦訳は『生と死の妙薬』青樹繁一訳、新潮社、1987『沈黙の春』（新装版）青樹繁一訳、新潮社、2001
- 8) “A Case Study on Environmental Contamination” Paul Knight, Rachel Carson Council Inc. 1964
- 9) “Silent Spring” in “Reporter at Large” The New Yorker 16, 23, 30 1962
- 10) “Since Scilent Spring” Frank Graham Jr., Houghton Mifflin Company, 1970
- 11) “Silent Spring Revisited” Gino Marco et al. American Chemical Society, 1987
- 12) 『神と自然の科学史』川崎謙 講談社 2005 p123
- 13) “Memorandum on the effect of commonly used insecticides on man and animals” Rachel Carson, February 2, 1958
- 14) 『レイチェル レイチェル・カーソン「沈黙の春」の生涯』 p31
- 15) The Wood Thrush/Audubon Naturalist Vols. 4-19
- 16) “Always, Rachel: The Letters of Rachel Carson and Dorothy Freeman, 1952-1964 — The Story of a Remarkable Friendship” Rachel Carson, Dorothy Freeman, Martha Freeman, Beacon Press, 1995
- 17) 同上 p394
- 18) 『センス・オブ・ワンダー』 “The Sense of Wonder” Rachel Carson, Harper & Row, 1965 邦訳は上遠恵子訳 新潮社 1996
- 19) “Help your Child to Wonder” Rachel Carson Women’s Home Companion, 1956
- 20) “Our Stolen Future” Theo Colborn, Dianne Dumanoski, John Peterson Myers, Dutton 1996
- 21) 「平成16年度体力・運動能力調査結果について」文科省報告